

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成22年度技術情報第4号(イチゴの炭疽病)について(送付)

下記のとおり情報を取りまとめましたので送付します。

.....

親株床で炭疽病の潜在感染株が多く確認されています。本病は5月以降、感染親株から子苗への感染が増加するので、この時期からの防除を特に徹底してください。

1 農作物名 イチゴ(育苗期)

2 病害虫名 炭疽病

3 予報内容

(1) 発生地域 県本土

(2) 発生量 多

4 情報の根拠

(1) 4月1日～5日に行った親株床での調査では、前年よりも潜在感染ほ場が多く、川薩・曾於地域では潜在感染株率が前年よりも高かった(下表)。

(2) 平成18年頃から、6～8月に発生ほ場率が急増する傾向にある。

(3) 平均気温が20℃を超える5月以降、感染株に多数の分生胞子を形成し、雨水やかん水等によって飛散・伝搬する。

表 親株床での炭疽病菌感染状況

調査場所	平成22年4月調査			平成21年4月調査			調査地点
	調査ほ場数	潜在感染ほ場数	潜在感染株率(%)	調査ほ場数	潜在感染ほ場数	潜在感染株率(%)	
日置	5	2	7	5	3	5	日置市伊集院町中川
川薩	4	2	30	5	3	6	さつま町湯田・白男川
曾於	7	7	71	9	6	11	志布志市有明町
合計	16	11(69%)	41	19	12(63%)	8	

注) () はほ場率、潜在感染株率は平均値(1ほ場20株調査)。

平成22年は4月上旬、21年は4月中旬に親株の外葉を採集した。

5 防除上注意すべき事項

(1) 雨よけ、排水対策および防風対策を徹底する。灌水にはできるだけ灌水チューブ等を用い、水滴による胞子の飛散を防ぐ。

(2) 地床育苗では、ビニールマルチ等で降雨等による土のはね返りを防止する。

(3) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。

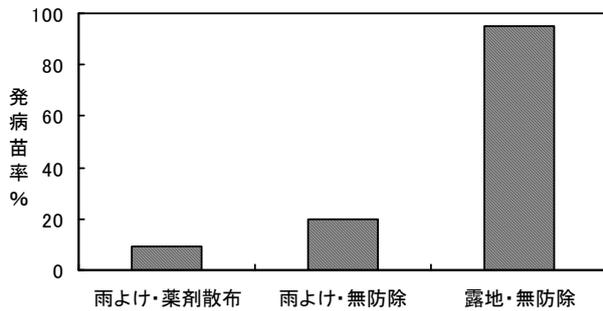
(4) 薬剤は株元を中心に十分量を散布する。薬剤による予防散布は10～14日間隔で行い、発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(5) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。

(6) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ビニール袋等に入れて適切に処分する。

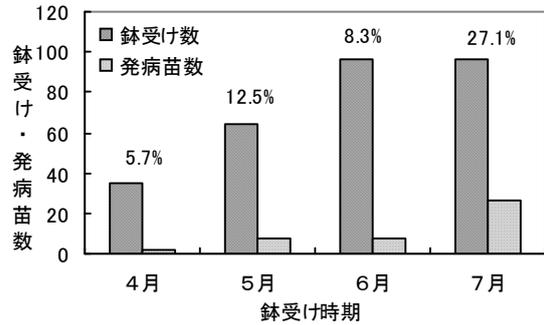
(参考)

健苗育成のためのイチゴ炭疽病防除対策（平成20年度普及に移す研究成果：普及情報）より抜粋



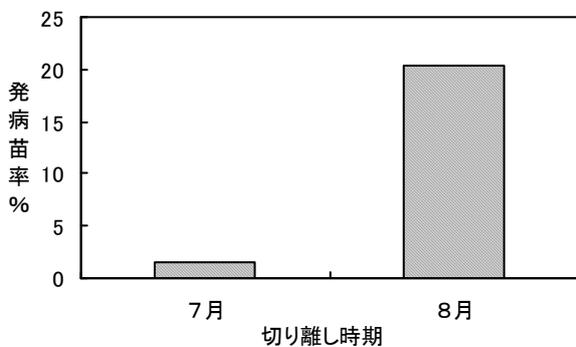
第1図 雨よけによる発病抑制効果

注) 高設育苗, 苗を7月7日切り離し



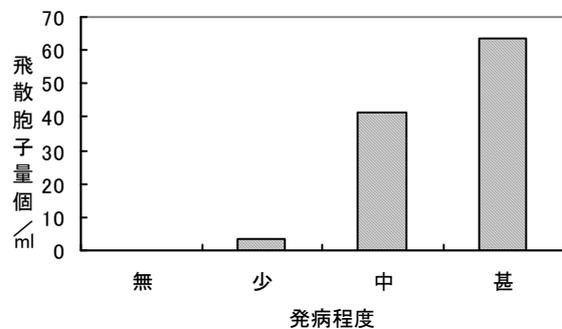
第2図 鉢受け時期別の生産苗数と発病

注) 図中の数値は発病苗率



第3図 切り離し時期別発病苗率の比較

注) 苗切り離し時期：7月7日および8月7日



第4図 炭疽病発生程度別飛散胞子量比較

注) 胞子飛散量調査に用いた発病株の症状
少：葉のみに発病
中：葉と葉柄に発病
甚：葉と葉柄に発病し、株が萎凋

【成果の内容・特徴】

- 1 雨よけ育苗は炭疽病の二次感染を抑えるため防除手段として有効である（図1）。
- 2 4月～7月に鉢受けを行い鉢受け時期別に炭疽病の発生を比較すると、7月に鉢受けをした苗がもっとも発病率が高く、鉢受けの遅れが炭疽病の発生を助長する（図2）。炭疽病防除と苗数の確保から、鉢受けは5～6月に行うことが望ましい。
- 3 炭疽病感染親株を定期的な薬剤散布を行いながら育苗すると、育成された苗での発病葉は7月に切り離した苗では少ないが、8月に切り離した苗は多発し、切り離し遅れが炭疽病の発生を助長している（図3）。
- 4 炭疽病を僅かに発病した株からも分生胞子飛散が認められ、発病程度が進むほど飛散量が多くなることから、発病に気づき次第早急に除去することが重要である（図4）。

※鹿児島県農業開発総合センターホームページ研究成果「普及情報」参照